ノーモア・ミナマタ〜阿賀に生きるいのち　山内若菜展　関連イベント
山内若菜ギャラリートーク「いのちを描く」

聞き手　星野立子（新潟市新津美術館学芸員）
日時　2023年7月8日（土）14:00〜15:00
会場　医学町画廊1F（新潟市）

山内
　《阿賀にいきるいのち》という作品は、私のいのちのかたちなんだろうな、と現在は思っています。阿賀野川が人間に流れ込んできている様子や、昭和電工など、たくさんの豊かさも生んだ朝から夜の工場の在り方を描いています。正面に昭和電工正門の赤い屋根の建物があり、中心の人は、水銀量を調べられ、新潟水俣病によって堕胎せざるを得なかった女性を描いています。社会構造の中の人間、自然と共に生きる人間、この三項関係を一つとして描くことを最初に考えました。
　一つの場所の中に、過去も未来も現在も有機生命体として描けるのは絵だけだと私は思っています。もちろん、他にも音楽など色々な方法がありますが、一目にしてわかるのは絵という表現にほかならないのではないかと思います。
　そして、自分が変われば社会も、社会の関係性すらも変えられる。そのような可能性を、力強い希望として、この一つの場所に込めているとも言えます。私は必ず、変えられると思っているんです。けれども、こちらの世界は、ものすごくシワシワしていて傷だらけなんですよね。社会の構造自体が、いまボロボロになっているんじゃないか。そう思い、襞のなかに感情を込めています。そこには、私の辿ったいきさつがあるのだろうと思います。私はずっと、東日本大震災の時に福島で被曝した牧場を取材していて、その馬の立髪を画面の一部に埋め込み、呪術行為をしています。さらに、銀箔を貼ることで水銀の含有量を表したりと、素材にもこだわっています。新潟水俣病で起きたことは、福島の構造ととても似ていると感じています。生物多様性を描くのに、たくさんの色を使っていますが、この作品自体が心臓のように脈打つ生き物で変わりゆく。そのような部分をみなさんに見つけてほしいと思っています。この絵が私のいのちのかたちなんだ、というのは、最終段階になって段々わかってきました。だからこそ、みなさん一人ひとりにこの作品を違うストーリーにして―この女性の表情を想像したり、自分のものとして何かというような――歩踏み出して見てほしい。この絵をそのような生き物のように届けられたらと思っています。
　小品では、新潟水俣病に携わるたくさんの人々を描いています。今回の制作の取材に関わってくださった方々は、若い学生の方から報道陣まで、みなさん心を込めて水俣病について闘っていました。そのことに私は感銘を受け、自らも闘いたいという気持ちで、そのような方々から私自身も見つめ返されつつ、この空間で２週間を過ごさせていただきました。

－－ 初めて作品をご覧になる方もいらっしゃいますね。後ほど、近くでぜひご覧いただきたいのですが、まず、学芸員目線で言うと、これを壁に展示するのはとても大変です。すごくシワシワとしているのがわかりますよね。「脈打つ心臓」「有機生命体」と表現されたとおり、不定形で、壁をはみ出して天井で折れ曲がっています。
　画面上方には、阿賀野川沿いの昭和電工やその廻りの工場地帯、木などの風景が描かれています。

時間は、向かって左から右へと、進んでいる。

山内
　そうです。色鮮やかなのは工場の屋根で、朝・昼・夜と一日が流れています。星も出ています。

－－ そこに、三つの関係性－－ 人間を中心に、自然があるんですね。

山内
　女性が阿賀野川に浸かっている姿を表現しています。多様な微生物を含めた自然を描いています。

－－ 確かに、水は一様に流れているのではなく、粒つぶが描かれていますね。色々な微生物とか鉱物、昭和電工から流れ出た化合物みたいなもののイメージもあるのでしょうか。

山内
　水銀が入った状態のものが光っているとも言えます。タニシなどの色々な貝殻とか、昆虫類も描かれています。それを、今度は小さい子にも見つけて欲しいですね。「どこにいるのかな」とか「何匹いるのかな」とか。低い目線で、１～２歳の子が見つけ出せるように工夫しています。

－－ そうですね。人によって目の前に見えてくるものが変わってくると思います。そして社会が工場地帯として描かれているのでしょうか。

山内
　工場の正門前には、毎日、昼も夜も動き続けるお金の動きがあって、人間が社会・構造・関係性の中にいる。同一の画面の中で必ずその動いている様子を描きたいと思いました。

－－ お金も流れているというのは面白いですね。最初に時間の流れのお話はありましたが、経済的な循環もあるということですね。

山内
　そうですね。それ無くして公害問題は語れないと思っています。

－－ ところで、福島をテーマにした作品の縦は、７メートル位あるのでしたか。

山内
　そうですね。

－－ 「そうですね」とさらっと仰いましたが（笑）、それをアトリエで描いている。新潟日報の記事（●月●日朝刊）には脚立に乗って描いている若菜さんの写真が出ていましたが、時にジャンプして描いたりもされています。福島の作品は縦に展開されいてる絵なのに対し、今回の作品は横方

向への展開ですね。最初から横で行こうと思いましたか？

山内
　そうですね。川全体、という生き物にしたいと思ったので、何か川の流れが上から下へ流れているようなかたち、そして巡るような羽のようなかたちで不定形の横長に、という感じがありましたね。朝・昼・夜という時間も横軸で感じられるようにしたいなと計画しました。

－－ そのアイデアはギャラリーの壁をご覧になって生まれましたか。それとも取材するうちにでしょうか。

山内
　どちらもです。あと、やっぱり自分の作品には、空間をはみ出すところ、ペロンとしたところが必要なんです。あれは計画的です。はみ出す要素が欲しいんですよ。展示壁の中に収まらない可能性、それを見てほしいですね。そこに収まるようじゃこの想いは伝えきれないと思っています。それくらい人間があまりにも苦しめられ軽んじられていて、許せないという感情を表現するための「ペロン」です。

－－ 上に折り曲がっている部分のことですね。

山内
　そう、はみ出すくらいの、空間を超えるやり過ぎ感というか。よく言われるんです、「やりすぎでしょ」「大きさもやりすぎ」とか。

－－ 美術館で絵を飾る仕事をしている者にとっては反省になります。私がこの絵を壁にかけることになったら、「どうやって壁に展示するのか」とか「展示後お返しする時に破れちゃいますよ」とか、そういうことを心配して、もしかしたらその絵を小さい方向に収めようとしてしまうかもしれない。描かれているテーマも、「枠」には敢えて収めない、収めさせない、という感じがすごくあります。多分、そこに収めようとするのは「社会」。そのようなボロボロの社会に対するアンチテーゼなのかと思いました。

山内
　枠の中だけで表現させようとする。「こういうもんでしょ」と言ってくる権力側の力に対して、「そんなもんじゃない」という言い方になるのでしょうか。まあ、感覚でやっているのですが。今回はそうだったんだろうと自分で振り返ることができました。

－－ いつ頃から、敢えてのペロン、を感覚的に始めましたか。何かきっかけはありますか。

山内
　原爆の図丸木美術館で2016年に展示した時に、作品が壁に収まらなくて台形になってしまったん

ですね。作品は15メートルにもなっちゃったんです。けれど、その時は自覚していませんでした。

－－ すごい。

山内
　あまりに空間の使い方が下手だと抑えられてしまいました。だけど、そこまで空間を超えてやってしまう乱暴さ、その勢いに感動する人もいたんです。それがきっかけとなって、2021年に丸木美術館で二回目をの展示をした時に、「ああそうだったのか」とちょっと自覚しました。「ペロンがない」「ペロンが見たい」という意見もあって、もうみんな、「ペロン」で通じるようになってしまって（笑）。自分の特性についてちょっとだけでいいから自覚して、そのかたちをやっていくというパターンが大事なんだと思いました。

－－ それが自分なんだと自覚してきたということですね。

山内
　美大では、綺麗に飾る、その場をどう一番見えやすくするか、ということを教えてもらいますが、私はそれに反した行為だから、みんな「下手だ」と言うんですね。だけど、それを自分らしさにしていく。それは何を表現したいか、ということにつながると思いますね。

－－ 下手だと言われた時に、何か悔しいような、でも自分にはこれしかできないという気持ちもあったんじゃないですか。ちょっと葛藤がありましたよね、きっと。

山内
　そうですね。「なんだこれは」「これが絵なのか」と。見にくいし。けれども、見せようというよりも、「どうだ！こんなんなんだぞ」という説得力があると自分は思っています。みなさんから言わせると「下手だ」とか「空間が使われていない」。けれど、体感型とも言い換えられるかなと思っていました。

－－ 若菜さんは日本画大賞展で入選されています。来場者のみなさんは、いわゆる横山大観や東山魁夷といった人たちと同じジャンルと言われると、ドキッとするかもしれません。日本画であるという意識がありますか。

山内
　そうなんです。和紙に岩絵具を膠で定着しているので材料的には日本画ですね。そして揉紙法を自分で応用したとも言えるので、和紙の技術としては全く同じことをやっています。けれども、濡らしたり乾かしたりする時間がすごく長いと、シワシワになったり、繊維質の亀裂が走った表面になっていくんですね。これは自然の行為です。自分は、息をするように描く。なので「なんだこれは」と思うこともあるけれど、自分にとっては心のかたちとイコールであって、手を伸ばした様な、不定形の生命感があります。なんだかけばけばしていて。チョキっと鋏で切ったような金属製のも

のではないんですね。もっと複雑で、多様で、こんなに傷ついている。やっぱり自分の心が傷められてきたということから絵描き人生が始まっているので、これが自分の吐き出したいかたちなんだろうと思うんです。

私は、ブラック企業で15年間働き、派遣もやってきて、ずっとモノみたいに働かされました。大学卒業後は氷河期世代で、就職難でした。それで朝も夜もなく働きながら、朝５時に起きて少しだけ描き、もう６時には家を出て、夜中の12時に帰ってまた描いて、日曜日は眠るようにぐったりしているという生活が15年間続いたんですね。そのことと、被曝して、じゃあ放射能に汚染されたから殺そうと言われる福島の家畜と、社畜の自分の姿を重ねたのが絵描きとしての始まりなんです。だからこそ、傷ついてくしゃくしゃになった自分像が乗り移ったかのように、絵に生き物として出てくるのだろうと思います。

けれども心惹かれるのは、闘いがあるところですね。困難に打ち勝とうと多くの人が心を寄せて、新潟水俣病をどうにかしたい、もう二度と起こさせたくない、と闘っている姿を見て、それを絵に隠喩させて描くし、動物たちを隠喩として人間を表現していると思います。動物の力を借りながら。もちろん、被曝したのは人間だけじゃなく動物もです。新潟水俣病でも、樹からも水銀が検出されていて、動植物全てが苦しんだとも言えます。そういうものを描きたい。けれど、どんなに苦しい状況でもそこに入る光がある。その光は、画面の皺の亀裂や穴から出てくるものではないか、そういうふうに絵が教えてくれるんです。

－－ いま、若菜さんとしてはかつて話しにくいと思ったようなことも、お話しくださったのではないでしょうか。「社会を変えたい」や「自分の傷ついた経験を」というお考えについては、お配りした岩波の『図書』（●年●月号）に、丸木美術館の学芸員岡村幸宣さんによる文章が出ています。私は最初にこの文章を読んだ時、この重厚なテーマを、何も知らない私が学芸員だからという理由でのうのうと出て行って話すのかと身構えたんです。ですが、先ほど「傷からみえる光」という言葉があったとおり、神奈川の藤沢で展覧会を拝見したら、絵が、図版で見るよずっと明るかったんですよ。会場は昔の商家、木造家屋の土間でしたが、日光が入ってくる空間だったこともあって、キラキラと本当に明るく、自分の認識が改まりました。テーマが原爆、公害、シベリア抑留であるから絵が暗い、と思い込んでいたのだと反省しました。

みなさんは実際にご覧になっていかがでしょう。軽い絵ではないと思いますが、暗い絵だとはあまり思われないんじゃないでしょうか。周りの壁に展示した小さい作品には、患者さんなど、実際に水俣病で苦しまれている方が描かれています。その背景は確かに辛いものですが、希望のようなものが必ず描かれています。例えば、猫の作品。新潟水俣病に侵された猫ですが、可愛いだけじゃないんですよね？

山内

狂い死にした猫です。新潟水俣病を最初に人間に教えてくれたのは猫だった、ということから踊っている猫です。狂い死にながらも踊り、立ち向かい、立ち上がっている猫。たくさんの動植物や魚の骨と一緒に昇華していく。そのような力強い姿、祈りを込めて描いています。だから、決して悲劇的な、涎を垂らして死んでいる姿ではなくて、「これから死んでも生き返ってやったるで」という猫なんですね。すごく美しい瞳を持っていながら亡くなった、その猫にもう一回やっぱり希望

の光を当てたい。というか、自分の光を放ちたいと願っているような、希望の猫なんです。別の、星と共にに踊る猫の作品も、同様に、猫が帽子を被ったような瞬間もあったんじゃないかと想像して描いています。ファンタジー化することで、みなさんが見た時にいろんな物語りを作って欲しい。苦しむ猫は、そのようなことにつながり得る可愛い存在だと思って描いています。

– – 事前の打ち合わせの時に、どうしてそのような重厚なテーマ、社会の負の部分を描かれるのですかと伺ったら– – 変な意味じゃないですよ– – 「胸がキュンとなるんですよね」って仰っていましたね。それは頭で整理できることではなくて、衝動的にという感じでしょうか。

山内
　胸キュンなんです。可愛いというよりも、涙が出ながらキュンとするという感じです。そういうものが放つものを生き返らせられるのが絵だから、どうしても描きたいと思っちゃう。水俣病の患者の方が、「狂い死んだ飼い猫もいまは踊って浮かばれますね」と言ってくれたんです。ポジティブな描き方だと、それがむしろ悲しいような気がしています。絵では、自分の中に対象をまず取り入れてから出すんですけれど、その行為がまず優しいものであってほしいなと思うんです。何か「これを見ろ」という衝撃的なものではなくて、そうなったらいいなという願いを込めるというか。「いのちがこうであったらどんなに幸せな世だろう」、むしろ「変えよう」と訴えているような感じで描きます。言葉を持たない動物って、人間よりも言葉を放つような気がします。声なき動物こそ物語る。だからこそ自分の理想を込められる。私も闘いたいし猫も闘いたいと思っている、という感じでしょうか。

– – なるほど。声なきものでいうと、《阿賀にいきるいのち》の主人公の女性も、こっちを向いて叫んでいるのではなく、後ろ向きですね。見る人が入っていけますよね、この背中に。

山内
　表情をみなさんに想像してほしい。表情は一人一人違うので、私にとっては希望でも、他の人にとっては違うかもしれない。だからこそ絵に入り込める要素が強くなると思います。私は、この女性の指先、足先の指先、手の指先、そういうところに私の感情を込めています。立ち方もそうなんですけれど。だから表情はもう、みなさんに委ねたいなと。

– – 先週、この会場で、たっつぁん・しんちゃんによる弾き語りの音楽のライブ、酢山省三さんによる詩の朗読と、皆川榮一さんが話をされたイベントがありました。それを作品の前で行う、というのがとても良かった。たっつぁんが歌った時、《阿賀にいきるいのち》の女性の前に背中合わせに立って、ギターを弾きながらユラユラ揺れるんですね。その時になって初めて、この女性の三つ編みが横に流れているのを見て、「あ、風が流れているんだ」と気付きました。時間が流れている、お金が流れている、ということも表現されていますが、ここには風が流れていて、絵の前にあなたがいるという感じがある。ああすごいな、やっぱり生きている絵だなという感じをすごく思いました。
　そして三つ編みの先には工夫がしてあるんですよね。

山内
　福島の牧場の馬の立髪を埋め込んでいます。被曝した馬の立髪を埋め込むことによって、ここで取り上げていることは福島の構造と同じだということを隠喩しています。「絶対変えてみせる」という呪術行為です。

－－ 馬はただで死んでいったわけではなくて、馬の毛が代弁してくれることもある。

山内
　ロシアでは、シャーマニズムの画家たちの間で、毛で描くという文化があります。いいな、と思って。そこから呪術行為が始まりました。福島の問題と絡めるという意味でも、画材が両者のつながりを語ってくれる。もう自分が言わなくてもいいなと思って。大事な絵の具です。

－－ あと、今日初めて若菜さんにお会いした方もいらっしゃると思います。大きな絵を描いている方だから、私は最初にお会いした時、「こんな小柄な方が」と驚きました。すごいですよね、体力が、エネルギーが溢れ出ています。
　それから、手足に表情を持たせているということですが、こだわって描く部分ですか。

山内
　そうですね。手脚のところに水晶末という鉱石を砕いたものを付けて、手脚の痺れを表現しています。小石が詰まった様な感覚になる、というご意見も本当に多かったので、それを表現するため、端末のところにモコッと使っています。ザラザラした触感で見てもらえるように。脚先や指先をしっかり描くのは、痺れながらも頑張る姿の表現につながると思いました。髪の毛は風に吹かれているけれど、何か女性の丸い感じ、風に委ねながら一緒に立っている感じです。筋肉質の男性が立っているわけではないんです。私の構想は、やっぱり自分の投影でもあるし、自分が新潟を見ている－。取材をして、闘うのは自分自身ですし、この女の人は、遠くの自分自身だったかもしれない。自分が子供を失ったらどんな気持ちだっただろう、と自分に置き換えて描いています。だから、しなやかに立っている姿にしたかったんです。

－－ 取材して溢れ出る感情や思いを前に制作されているということですが、取材を始められたのはいつだったんですか。

山内
　去年の夏ですね。約一年前。

－－ 一年間でここまで。周りの絵も含めてですが、私にしてみれば、すごいスピードに驚きます。
　スピードと言えば、今回、患者さんに取材に行った時の話で、コーヒーにまつわるエピソードがあったと思うので、教えていただけますか。

山内
　皆川榮一さんご夫妻のところに行った時に、コーヒーを出してくれたんです。けれど、いきなり、それをボチャンとして、ティッシュでちょぴちょぴっと画材にして描かせていただきました。何かこう、茶色の表情を描きたいなと思ったんです。醤油でも何ででも描いちゃう傾向があって…メモするように描きました。その時の感情は、そのあと思い出す時に、写真を使って描くよりも実際に近いものなんです。だからそういうドローイングは結構大事にしていて、今回の展示でも飾らせてもらっています。青い作品や下地に用いたり、皆川さんご夫妻の作品にですね。コーヒーを使って現場で描いた作品も二つあります。下地は、現場で皆川さんが言ってくれた言葉を聴きながら描いたものですね。

－－ びっくりしたでしょうね。皆川さんは。

山内
　（笑）ええ、意外！みたいな。

－－ 今回の展示作業の後に食事もしたんですけれど、その時にも、若菜さんは説明しながら、お店のマットにもう描いていました。考えるように描く、それがもう別のことではなくて一つのことなんだなと思いました。小さい頃からそれが当然ですか？

山内
　そうですね。でも、メモなんですけどね。ドローイング。今回は取材した集会の場でメモしたものをベースに小品が出来上がっています。メモが大事なんだろうなと思います。

―感じながら描いたということが。

山内
　薄い和紙を持ち歩いてメモしていて、帰ってからそれを貼ったりします。感情の流出、発露みたいなものがそのメモには詰まっていて、それを貼った上に加筆することで、生き生きとした線が失われずに作品できる。ドローイングをタブローにする、その両者の垣根がなく、柔らかく仕上げていきたいという気持ちが今回の小品に繋がったと思います。その後、水晶末を重ねるなどして描いていくうちに、感覚的なものは段々わかってくるんですけれど、最初はやっぱりメモなんです。メモの線というのは、だから大事なんですね。

―その時にしか出せないような線がありますか。

山内
　そうなんですね。だから小ちゃいですね、そういうメモは。この女の人を描いたドローイングも、本当はすごく小さいです。それをだんだん大きく拡大します。やっぱり小さい作品というのは線が魅力的で、その発想の時の線を大事にしないと、大きいのも全くうまくいかない。

―あの時の感じを思い出しながら引く線、というはやっぱり違うということなんですね。
　線というと、実は昨日気付きましたが、《阿賀にいきるいのち》は、DMに用いられた写真では画面左の少年の横顔はないですよね。最後に足されたんですか？

山内
　はい。このカラスに変わっちゃう猫の像もないんです。描き加えるうちに、この子の正面の顔であるかようなものも出てきて、画面左手が未来だとすると、そちらを見ているような表情に…と変幻しています。この猫は「魚獲ったぞー」という姿が赤いカラスに変わってしまった、という悲しい変幻です。DMの時から結構加筆していて、画面のキラキラしたものも、送っていただいた川の水をもう一回顕微鏡で見て、虫を探したりしながら、もうちょっともうちょっとと点々を描いていのちを増やしていきました。

―そう思うと、たしかにいのちが増えて、いっぱいですね。

山内
　たくさんのいのちが作っている世界への賛歌なのかな。それが一個のいのちとなって、変わりゆくものとしてかたち作られてきた。この段階の生き物がどっくんどっくんと脈打つ姿を一緒に描きたいという感覚で、みなさんに見てもらいたいのかなと思いますね。

―会場のみなさんから、ご質問やご感想を寄せていただけたら、と思います。

質問者１
　３つお聞きしたいんですが、まず、コーヒーで描くというのは指で描かれるんですか？

山内
　ティッシュに含ませてポチャってやって、ちょっと出してちょぴって感じで（身振り手振りを交えながら）。スポンジみたいに使いたんです。手でやることもありますが。水彩色鉛筆という水に溶ける色鉛筆も使っているので、コーヒーの濡れ方でも溶けるんですね。そんなにビックリするんですかね（笑）？

質問者１
　ロシアや東日本大震災はわりとメジャーなのでわかるんですが、どうして新潟水俣病を？

山内
　新潟水俣病はずっと描きたいと思っていました。四大公害病の中でもあまり語られていなくて、私の地元の神奈川の人なんかは、終わった話でしょ、と話しているくらいです。だけど、そんなの終わっていない、というのを私は知っている。だからこそ、本当のみなさんの運動というものが、どうなっているのか現場で見たり、患者さんにインタビューさせてもらいたいと思ったんです。最

初に「新潟で個展をしないか」と、深江淳さんという先輩の画家から声をかけられた時に、だったら新潟水俣病で展示させてください、と頼み込んでやらせてもらいました。

質問者１
　最後に、和紙のシワシワは、立体感を出すという狙いも多少ありますか。

山内
　何か立体感を出そうというよりも、この溝や皺を生命体のようにしたい。襞のある生き物、年輪がいっぱいあって、傷つけ傷つけられても生きている、という健気な状態にしたいんです。皺はわざとは寄せておらず、和紙を貼るうちに徐々にできていくもので、作ろうと思って作ったことは一度もありません。ああ、これかこれか、と対峙していくうちにできてくる。描いてから、「こんなふうにしたかったかな」と思うのだけど、出来上がるとこういうふうにできている、という感じがあります。そういう素材を選んでいるんでしょうけれど。「これ、こんな感じ」というのを積み重ねていって、「違う」と思うと濡らしてみたり。それで乾かしてみると、「ああ、こういうのができた」と。そういう発見の連続ですね、アトリエでやっていることといえば。

質問者１
　ありがとうございます。

質問者２
　いま肉筆の絵を拝見して、生命力とか力強さをすごく感じるんですが、先ほどお話しもされていた人物や動物の目に力があります。ずっと見られているような。目は、左右非対称で描かれていたり、色を変えていらっしゃったりするようですが、ご自身で敢えてそうしているのでしょうか。また、どんな意味を込められていますか。

山内
　目の光は描くのが本当に好きなんですよね。いのちがあそこに生まれる段階がある様な気がしています。左右非対称というのは、自分がでこぼこしている存在でもあるし、同じように整えないというのが身についていて…。同じように描いたら、描いていないのと同じだという感じはあるんです。瞳のキラっとした光を入れる時って、「ああ、生まれた」と感じる、ちょっとドキドキする時ですね。猫も、馬もそうです。壁の作品に登場する馬と少女は、自然と共に生きる、シャーマンである少女と馬を予感させるように描いています。福島で、避難しないで生きている二人の物語。瞳をちろっと入れる時に、すごく愛し合っているような…。自然と一体にある人間像は理想なので、そういうものを描けた瞬間は、すなわち瞳の瞬間なんだろうなと思います。
　ありがとうございます、よくご覧いただいて。

質問者３
　今日はありがとうございました。 新聞の記事を見た時に、この絵の色合い発色にちょっと驚いたのですが、いまお聞きして、日本画だったのかと。山内さんは何故日本画を？学校で専攻された

のが日本画ですか？

山内
　私は油絵です。

質問者３
　油絵の専攻なんですね。なぜ和紙と日本画の顔料をお使いになって描いていらっしゃるのかなと思いました。

山内
　和紙の呼吸するような何か生々しい地肌感―ザラザラしていたり裏はツルツル、ザラザラだったり―と触感が全部違います。そこに、水を使い鉱石を砕いて定着しますが、この石にも細かいものからざらっと粗いものまで、すごく幅があるんです。油絵は一緒くたで、ネチョッととした触感ですが。作品には、黒い部分にアフリカの砂なども入れていて、粒がすごく大きいのもあります。そういう画材が、指先のザラザラ感や、今回の水俣病の患者さんの表情などを表しやすいと思いました。また、私の長崎・広島・福島を描いた代表作にも言えますが、やっぱり日本画で表したいと考えています。日本で起こった、問題の多い、たくさんの闘いが溢れるところ。日本画には様々な定義があって、省略するとか、侘び寂びの世界であるとか、マッスではなく線で捉えるとか…そういった定義よりも、これは日本の問題提起でもあるから日本画でいいのかなとも思っています。和紙と水を使って、鉱石の砕いたものを膠で定着する。材料的には、私は、日本画家と言われるけれども日本の傷口画家というか、ボロボロな日本画家、何かそういうことなのかな（笑）。まあ、ブラック企業で働くというのは日本独特の現象で、小さい子ですら、動画で社畜人生について見て「社畜、社畜」って楽しく言っています。そんなこと、私当時は思えなかった。本当に深刻な問題として、自分が社畜であるということにドヨーンとしていたので、いまのあっけらかんとした若い子達が本当に社畜になったらと思うと…。若い世代のためにも、この形態を私の人生を含めて言語化することによって、次の世代がもっと生きやすい世界にしたい、社会構造自体をもっともっといいものにしたい。そのようなすごく革新的なメッセージも、絵の裏側に含ませています。

質問者３
　これ、全部同じ日本画なんですね、油絵ではなくて。ありがとうございます。

―今のお話に感想を添えるとすれば、画一化された工業製品―人間すらも工業製品―ではないものを描くのが若菜さんのお仕事であり、広く言えば、それは芸術にしかできないことなのかなと思いました。例えば、新潟水俣病では、「何人が亡くなりました」「何年にこういうことがありました」という数字や説明には出てこない部分です。実際に患者になった人には、家族も知り合いも自分の祖先もいて…という、その人の生の複雑さや個人まるごとそのままを、どうやったら伝えられるかという時に、映画や音楽という方法もありますが、絵というものができることなんだと、気付くことができました。

質問者４
　今日はありがとうございました。私は丸木美術館行った時に、本当に大きな絵の前で圧倒されました。絵によって表現されるもの…焼かれて溶けてしまう身体をそのまま描くのではなくて、丸木さんは綺麗に描くと仰っていた気がします。傷と向き合いながら、すごく希望について語っておられて、すごいなと思いました。丸木美術館で個展をされたということですが、丸木美術館の影響や出会いは大きかったのでしょうか。

山内
　とても大きかったです。2016年に個展させていただいて、私の圧倒的な力不足が露呈したのですけれど…美しく素晴らしい絵画作品が展示されているので本当におすすめの美術館です。丸木夫妻は原爆そのものを描かず、やられた側である、傷つき火傷して死んだ人たちを美しく蘇らせて描いています。「あんなに美しく死ぬわけないじゃないか」と言われるけれど、その人間の美しさに圧倒されます。その画力が私にはない。難しかったですね。原爆の図の隣で、私は《牧場》という作品を展示しましたが、とてもじゃないけれど、みなさんには真っ暗でわからない、絶望しか感じない画面になってしまったんですね。その後、何とか暗闇を、黒くて真っ黒な絵を15メートル、30メートルまで描いたけれど、このまま絶望のような原発事故を描き続けるわけにはいかない…と自分の画業が変わってきて、理想を込めて死を生に反転する描き方に変わっていったんです。いまも私は見つけ出している最中ですが、美術館ではずっと模写をしていました。模写天国で、入館料なしでずっと描けるわけだから、「やった」と思っていっぱい描きました。自分の会場そっちのけで。それくらい、過去の人たちの功績はデッサン力も含めて素晴らしいです。今でも私は模写をしています。

質問者５
　さっき、和紙を濡らし乾かして、その時に皺ができて、と仰っていました。自分の席の角度から作品を見ると、皺が水の表面、波を思わせて、川のかたちを表現されているかと思いました。そういう制作をずっとされてきて、こういった作品をたくさんお持ちだと思いますが、保存するのは大変ではないでしょうか。置いておく場所や、飾っておくのが難しいんだろうなと思いました。あと、表面の波打っているものは、今日のように湿気があると、湿度でだいぶ変形してくるのではないでしょうか。今まで作った時にそういうことはありましたか。

山内
　かなり分厚く丈夫なんです。結構重いし。作品をくるくる巻いて畳んでも、なかなか皺は残らないで、むしろそれが味になることもあります。皺が入りすぎて柔軟な表面になっていると思います。家には大きな柱を取り付けてつけて、そこに重ねて保管しています。二人がかりで作業するので大変ですが、掛けてしまえばダランと重力に逆らわずに保管できます。４～５メートルくらいの作品が５枚くらいあって、全部重ねてある。今回の作品も、誰か新潟が貰ってくれない限りまた同じことになると思います。保管場所はこのようになっています。

質問者５

　そうするとたまに皺が伸びたり？

山内
　伸びないです。強靭な皺になっちゃうんですね。たまには変わるのかもしれませんが、本人もあんまりよくわかっていません。まあ、意図的な皺というより、一緒に生きていく皺として、変わってもいいと思っているんです。運んでいる最中にポロっと剥離することもありますが、それ自体が旅する絵として、剥れてもいいというような感覚です。もう少しペッタリとくっつけたり、皺のかたちを固定したり、ということは今後の課題になってくるかもしれませんが、いまは、一緒に傷つきながら生きていく生き物でいいかなと思っています。